奢摩他・毘婆舍那広略修行成就して柔軟心なり」と示し、還相の菩薩に対し、何か不可思議な力によって、菩薩の還相のはたらきがそなえられていることの意と考える。親鸞は最後の利行満足章において、還相の菩薩が阿弥陀如来の本願力により、五果門の功德を満足されたと、又、「入出の次第の相を示現せしむ。」と読みかえられていることは、還相の菩薩のはたらきが、本願他力・浄土の徳によるものであると捉えていた面は強いと考えた。還相の主体である菩薩について考察してみると、親鸞は利行満足章の文を解せば、全体が阿弥陀如来の本願力回向におさまると考えられるが、和讃・和語集等の文を考えると、還相の菩薩が浄土往生し、浄土から菩薩となって摂化活動に出ると考える。しかし、菩薩の摂化活動のはたらきの全体に阿弥陀如来の本願力回向のはたらきが浄土の根源からはたらいっていると考えられた。

親鸞の念仏の内的構造

加藤 智見

「念仏」は、仏教史上さまざまな意味をもち展開してきたが、今回は「南無阿弥陀仏」と称える意味での念仏の、特に親鸞における念仏の内的構造の特色を、彼における「南無」の把握の仕方を中心に検討してみたい。

親鸞は「南無」を「帰命」ととらえ、一面で「帰命」は本願招喚の勅命なり(『教行信証』)と把握する。すなわち「阿

弥陀仏に南無せよ」と仏自らが衆生に向かって強く呼びかけ、働きかけるものとして帰命を把握し、念仏をそう受けとつている面がある。

と同時に、たとえば「言南無者」というのは、すなわち帰命ともうすみことばなり。帰命はすなわち釈迦・弥陀の二尊の勅命にしたがいて、めしにかなうともうすことばなり(『尊号真像銘文』)と把握する側面がある。すなわち勅命に従って招喚に応答しなければならぬと把握する側面があるのである。

この二面があるということは、「阿弥陀仏に南無しなさい」という呼びかけと「阿弥陀仏に南無します」という両面がすでに念仏の中にこめられ、念仏自体がすでに仏のほうから用意されていたのだと親鸞が気づいていることでもある。これは、從來念仏が三念や六念の一つ、観像・観想の念仏、五念門の一つとして主として衆生のなすべき行為として考えられてきたのに対し、親鸞が執拗に釈迦・弥陀の仏意の中に念仏の意味を聞き取ろうとしていることを表わす。であれば、念仏の主体は衆生であると同時に仏でもあり、このことを可能にするのは仏意による本願を堅く信じることであり、信為本に立った念仏であるということになる。ここに親鸞の念仏の内的構造の特色が考えられる。

では次に、このように呼びかけ、応答させようとする阿弥陀仏の存在は、どこかキリスト教等の人格的な一神教の神に通じるような面が考えられるが、この点から考えてみたい。

彼は阿弥陀仏について、「この一如よりかたちをあらわして、方便法身ともうす御すがたをしめして、法蔵比丘となりのたま

いて、不可思議の大誓願をおこして、あらわれたもう」(『唯信鈔文意』)と述べている。一如とは、真如ともいい、唯一絶対で、ありのままの、形相を超えた、いわば「真理そのもの」であるが、衆生のためにわざわざ姿をあらわし、その真理の世界に衆生を導こうと働いてくださっていると親鸞は考えている。

この真理の姿は衆生には見えないので、真理は自らを知らせるための方便として法蔵菩薩という人間の姿をとり、人間の言葉を使い、救い取ろうとしているというのである。親鸞の念仏はこのような働きの中に把握されねばならないものでもあるが、ではこの一如でもある阿弥陀仏は、宗教学的にはどのような考えればよいのであろうか。いわゆる一神教的な人格神ともいえないし、かといって哲学的な真理でもない。

彼は真理そのものという側面から見た仏を「法身」と呼び、「法身は、いろもなし、かたちもましまさず。しかれば、ころもおよばれず。ことばもたえたり」(同)というと同時に、阿弥陀仏を「尽十方無碍光仏」「不可思議光仏」とか「無量寿仏」などと呼ぶ。「光」や「いのち」のイメージをもつてとらえようとしている。ここには「法身」や「方便法身」という語を通して一如・真如・真理・涅槃の世界が人に関わろうとしているという、端的な真理ではない、いわば「いのちある真理」としてそれらがとらえられていると思われる。

したがって本来人格性をもたない一如が、その非人格性を捨ててまでも衆生に応答させようとする非人格的であると同時に人格的にもなる存在の「やむにやまれぬ」働きの中に、親鸞は念仏の根源を感じ取っているのであるから、そのような独自の

存在との関わりの中に、さらに念仏の内的構造が問われていかなければならないと思えるのである。

親鸞「自然法爾」における「はからひ」の意味

藤 能 成

親鸞(一一七三—一二六三)が晩年に著した「自然法爾の事」は、彼が生涯で到達したもつとも高い精神的境地を示す文章である。「自然」とは「おのづからしからしむ」の意であり、行者が「阿弥陀仏の御ちかひ(誓願・仏智)」について、はからわず、「南無阿弥陀仏とたのむ」時に、無上仏の働きにより、無上仏になりゆく階梯へと導かれることを意味している。その中で行者が離れるべき行為として「はからひ」について繰り返し言及するが、その意味は「繰り返し推し量る」知的・精神的な行為・活動であった。

初期仏教において、定と念仏は一体的に修された。対象に向かって念を集中する中で、定に入った。仏はもつとも念すべき対象であった。修行者は、慧を修するために定に入り、「言葉による知的・概念的な理解・認識」を抑制することにより、感性を以って世界の真相に触れて行つた。この「言葉による知的・概念的な理解・認識」こそ、親鸞が言うところの「はからひ」である。

念仏は「はからひ」すなわち(知性・理性により)「物事を、言葉を通して知的・概念的に理解・認識しよう」とする精神の